

平成28年度衛生研究所研究課題外部専門家との意見交換結果報告書

1 意見交換の開催日

平成28年8月5日

2 外部専門家名簿

所属・役職	氏名
国立病院機構三重病院臨床研究部長	谷口 清州
医療法人社団翠会 蓮根ひまわり苑施設長 (独立行政法人労働安全衛生総合研究所前理事長)	小川 康恭
千葉大学大学院医学研究院分子ウイルス学教授	白澤 浩

3 意見及び対応方針

次項のとおり

(1) 事前評価

研究課題番号	28-01
研究課題名	千葉県内の小児における呼吸器感染症起因ウイルスの動向調査
研究期間	平成29年度～平成31年度
研究概要	外来および入院症例から検出されたウイルスの比較から、小児の呼吸器感染症の重症化要因の解明に繋げ、感染症の予防啓発や診断の一助とする。
主な意見	小児に呼吸器感染症を引き起こすウイルスのうちで調査の対象となっていないウイルスの呼吸器感染症発生動向を調査することには意義がある。また、「25-04 呼吸器感染症起因ウイルスの動向把握（平成26年度～平成27年度）」の成果を受けた研究課題となっており、入院患者にも調査を広げた点が評価できる。重症例の定義及び収集する臨床情報の項目などを考慮し、偏りのない症例確保に努めること。
対応方針	「25-04 呼吸器感染症起因ウイルスの動向把握（平成26年度～平成27年度）」の研究成果を踏まえ、新たな評価方法を検討（ウイルス定量分析やサブタイプの検討、患者血清を用いた抗体検査等）し研究を継続する。また、サンプリング方法についても検討し、偏りのない症例確保に努めたい。

研究課題番号	28-02
研究課題名	人口動態死亡小票及び自殺統計原票データを活用した市町村単位での自殺の詳細分析
研究期間	平成28年度～平成30年度
研究概要	<p>平成28年4月に自殺対策基本法が改正され、都道府県だけでなく市町村にも「自殺対策計画」の策定が義務付けられた。計画策定には地域の自殺に関する現状分析が必要であるが、市町村単位での現状を表す公表データは少なく、具体的な対策の検討をしにくい。</p> <p>本研究は、既存のデータを用いた市町村単位の自殺に関する統計の詳細分析の方法を研究し、市町村の「自殺対策計画」策定に寄与することを目的とする。</p>
主な意見	<p>自殺対策を図る上で有用な情報は、今まで個別に利用されるのみであったが、本研究により、それらの情報をリンクして解析できれば、自殺対策をより効果的に進めるための有効な方策を提供することとなる。</p> <p>自殺に至るまでにはいろいろな経緯があると思われ、発達障害、うつ等の診療体制に関する調査や、医療機関受診歴のある患者では、診療録とのリンクも図り、記述していくことが必要だろうと考える。</p> <p>この研究によって自殺の予防と早期発見、具体的な対策を網羅した自殺対策計画策定につながることを期待する。</p>
対応方針	<p>地域特性、分析可能な症例数を慎重に考慮してモデル市町村を選定するとともに、関係機関等と密に連携を図りながら研究を実施し、研究結果を市町村の自殺対策計画に反映できるような形で公表していきたい。</p> <p>また、発達障害・うつ等の診療体制に関する調査や診療録とのリンクについては本研究では困難であり、精神保健福祉センター等の専門機関を中心とした検討が必要であると考えます。</p>

(2) 中間評価

研究課題番号	27-05
研究課題名	千葉県におけるダニ媒介性感染症に関する研究
研究期間	平成28年度～平成31年度
研究概要	<p>房総半島南部地域は関東でも少ない日本紅斑熱の流行地であり毎年発生が見られる。しかし、マダニ刺咬歴があり日本紅斑熱を疑われながら検査結果陰性のいわゆる「不明熱」が年間数例発生している。その原因はマダニ媒介性の他の新興感染症の可能性があり、本研究ではヒトに対する病原性を持った病原体のマダニ等における保有状況並びに浸潤状況を解明する。</p> <p>現在、県内で採取したマダニからダニ媒介性感染症を標的遺伝子としたスクリーニング PCR を 100 件程度行ったところ、エーリキア属菌が検出された。今後この検体から病原体を分離し、血清疫学的な浸潤状況を確認する。</p>
主な意見	<p>日本ではまだ流行していないエーリキア属菌によるダニ媒介性感染症の予防という観点から、流行予測をするための基本技術を確立するという点で本研究は意義深い研究である。</p> <p>今後、抗原スライドの作成が重要な課題になると考えられるが、複数のアプローチで確度を上げることを期待する。</p>
対応方針	いただいた意見を参考にして、研究を継続する。

(3) 事後評価

研究課題番号	23-05
研究課題名	千葉県内の温泉水におけるレジオネラ属菌に対する有効な殺菌剤の検討とそれに伴う温泉の泉質変化の調査
研究期間	平成24年度～平成27年度
研究概要	<p>県内にある温泉施設の中から、泉質の異なる4施設の源泉を採取し、レジオネラ属菌を添加し、この温泉水に2種類の塩素系消毒剤（次亜塩素酸ナトリウム、モノクロラミン）及びその他の消毒剤（陽イオン界面活性剤、ブロム系消毒剤、銀イオン製剤）を添加して、レジオネラ属菌の菌数の推移から有効な消毒剤を検討した（①）。さらに温泉分析を実施し、2種類の塩素系消毒剤添加による温泉成分の影響を検討した（②）。</p> <p>①の結果、レジオネラ属菌の消毒剤の基本とされている塩素系消毒剤は、硫黄を含有している温泉水では効果はなく、陽イオン界面活性剤が有効であった。</p> <p>②の結果、4施設全ての温泉水において、成分の変化は多少あったもののどの変化も泉質の分類に影響はなかったため、循環式浴槽におけるレジオネラ症防止対策マニュアルで定められた使用量であれば泉質への影響はないと考えられた。</p>
主な意見	千葉県における研究課題として妥当性があり、その研究成果の実利性も高い研究で、当初の研究目的を十分に達成し、着実な研究成果を得ている。この研究結果を情報提供し、レジオネラ症防止対策に生かされることを期待する。
対応方針	<p>①の結果については、平成27年度衛生研究所年報に掲載し公表する予定。</p> <p>②の結果については、関東甲信静理化学部会で発表し公表する予定。</p>

研究課題番号	24-02
研究課題名	紅斑熱群リケッチアの浸潤状況調査
研究期間	平成25年度～平成27年度
研究概要	<p>千葉県は日本紅斑熱の発生報告が毎年あり、関東でも数少ない流行地である。今回、特に発生報告の多い房総半島南部地域の浸潤状況を把握し、潜在的な感染リスクについて調査した。</p> <p>今回の調査で、マダニから高率に紅斑熱群リケッチア遺伝子が検出された。また、イノシシや放浪犬から抗 <i>R.japonica</i> 抗体が確認されたことから千葉県において広く紅斑熱群リケッチアが浸潤していることが示唆された。</p> <p>尚この研究成果を、第23回ダニと疾患のインターフェイス (SADI)、第22回リケッチア研究会、平成27年度日本獣医公衆衛生学会（関東・東京）で発表した。平成27年度日本獣医公衆衛生学会（関東・東京）では学術奨励賞を受賞した。</p>
主な意見	<p>千葉県における紅斑熱群リケッチア感染症のリスクアセスメントにおいて、非常に重要で有用な研究である。また、研究計画・方法も適切であり、得られた結果も研究目的を十分に達成している。</p> <p>今後の対策のためにも、発生地域の拡大について、引き続き検証することが望まれる。</p>
対応方針	<p>本研究成果については、学会発表で周知しており、日本獣医師会雑誌等に投稿予定である。</p> <p>発生地域の拡大については、今後もモニタリングを継続していきたい。</p>

研究課題番号	25-04
研究課題名	呼吸器感染症起因ウイルスの動向把握
研究期間	平成26年度～平成27年度
研究概要	<p>呼吸器感染症は、発生動向調査事業の対象疾病以外、十分に調査されていない。また、インフルエンザ様症状を呈し、臨床的にインフルエンザを疑われても、インフルエンザウイルスが検出されない呼吸器感染症患者は通年存在する。本研究では、2014年4月～2016年3月にインフルエンザ様疾患（ILI）と診断され、インフルエンザ簡易キット陰性であった299名（0歳～17歳）の鼻咽頭ぬぐい液を用いて、アデノウイルス（AdV）、ヒトボカウイルス（HBoV）、エンテロウイルス（EV）属 {ヒトライノウイルス（HRV）、コクサッキーウイルスA、B群（CA、CB）等}、ヒトメタニューモウイルス（hMPV）、RSウイルス（RSV）、パラインフルエンザウイルス（PIV）のウイルス検出状況を調査した。</p> <p>ILI症例299名のうち、189名から247のウイルスを検出した（同時検出47名）。検出されたウイルスは、CAが41名（11%）、HRVが36名（10%）、AdVが33名（9%）、HBoVが28名（8%）、RSVが25名（7%）、PIVが24名（7%）等であった。</p> <p>ウイルスが検出された189名のうち、47名（25%）で2種類以上のウイルスが検出された。これら重複感染例からはHBoV、AdVが多く検出された。さらに、HBoVが検出された患者の79%が重複検出例であり、小児の上気道重複感染にHBoVが関与している可能性が示唆された。</p> <p>本研究からこれらのウイルスが通年存在し、軽度の呼吸器感染症を引き起こし、その一部が重症化していくことが示唆された。</p>
主な意見	本研究は、重要な基礎研究であり、感染症予防対策を立てる上で基礎的情報として活用できる。

	<p>一方で検出病原体と起因病原体は異なるため、これらの評価が行える方法を検討し、今後の研究計画に活用して欲しい。</p>
対応方針	<p>研究成果を踏まえ、「28-01 千葉県内の小児における呼吸器感染症起因ウイルスの動向調査」として重点課題に取り上げ、新たな評価方法を検討（ウイルス定量分析やサブタイプの検討、患者血清を用いた抗体検査等）し研究を継続する。</p>